埼玉大学紀要（教養学部）第49巻第１号　2013年

持続と同一性

星　野　　徹*

Ⅰ　時間部分

ブルックナーの交響曲を聞いているうちに寝てしまった人は、交響曲を半分しか聞いていなかったことになる。また群衆に遮られてモナリザの顔しか見えなかった人は、「モナリザ」を半分しか見なかったことになる。しかし同じ半分とは言っても、ブルックナーとダ・ヴィンチでは中身が異なる。ブルックナーの場合は一時間以上もかかる演奏の前半部分、およそ 30 分間分しか聞いていなかったということであり、ダ・ヴィンチの場合は「モナリザ」の上半分、およそ 40 センチ分しか見ることができなかったということである。

時間上に延び拡がっている交響曲の演奏や野球の試合やテレビドラマの半分と言えばそれらの時間的部分のことであり、空間中に延び拡がっている「モナリザ」やトマトや野球場の半分と言えばそれらの空間的部分のことである、と普通は理解されるだろう。試合の半分と言えば 5 回が終わったあたりの時点のことだし、球場の半分がオレンジ色に染まっていると言えば球場の一塁側がオレンジ色だということである。

しかし、「モナリザ」やトマトや野球場にも時間部分はあるのだ、あるいは「モナリザ」もトマトも野球場も時間部分からなるのだ、と主張する哲学者たちがいる。そうした、四次元主義者と呼ばれる人たちの言うところによれば、交響曲の演奏や野球の試合やテレビドラマの放映のような出来事だけでなく、「モナリザ」やトマトや野球場のような物も時間の中に延び拡がっているのである。だから、ルーヴルを訪れた人が人垣をかきわけて「モナリザ」の前に立ったとしても、その人は「モナリザ」全体を見たことにはならない。その人はこれまで 500 年以上にわたって延び拡がり、また、これから先もさらに長い年月にわたって延び拡がって行くであろう「モナリザ」のほんの小さな時間部分を見ているにすぎないのである。1961 年に放送が開始された朝の連続テレビ小説を全部見た人や今シーズンの巨人阪神戦を全部見た人ならばいるかもしれないが、「モナリザ」全体を見たことがある人はこれまでもいなかったし、これからも出てくることはないのである。また、テーブルの上のトマトを丸ごと食べた人も、トマトの全体を食べたことにはならない。その人が食べたのはトマトの時間部分である。トマト全体を食べるには、トマトが実をつけた瞬間にそれを口に中に入れてしまわなければならない。一個のトマトを全部食べるのは至難の業なのである。

一見したところは奇妙に思われる四次元主義が支持を集めているのにはそれなりの理由がある。先程食べられたトマト、あのトマトは口に入る直前には赤く熟し柔らかかったが、しばらく前には青くて小さくて固かったことだろう。生まれたてのトマトを構成していた物質は、熟すころにはほとんどが別の物質と入れ替わっているかもしれない。二つの間には共通する部分がほとんどないかもしれない。それにもかかわらずどうして同一のトマトが存在し続けてきたと言えるのだろうか。

テーブルの上にあったのはトマトの一部分にすぎないと考えれば辻褄が合う、と四次元主義者は考える。トマトとは、青く小さな固いあの

* ほしの・とおる
埼玉大学教養学部教授，哲学

最初の段階から、赤く熟した先程の段階に至る時空に延び拡がった存在なのであり、青く小さな固いトマトと赤く熟したトマトは、トマトそのものではなく、一つのトマトを構成するトマトの時間部分なのである。上の部分が青く下の部分が赤いトマトがあってもおかしくはないように、前半部分が青く後半部分が赤いトマトがあっても何もおかしくはないだろう。

また、私は今こうして時間部分について考えている。それは私の人生のほんのひとこまに過ぎない。そうだとすれば、今ここに存在している私自身も、「星野徹」と呼ばれている持続的存在の時間部分であるということになるのではないだろうか。

しかし、現代の哲学者が皆そろってこのような四次元主義的世界像を抱いているというわけではない。出来事が時間的部分を持つのは確かであるが、人や物はそうではない、人や物はどの時点においても、丸ごと、余すところなく現れている（wholly present）のだ、と考える三次元主義者と呼ばれる人々ももちろんいる。

何と言っても、トマトを丸ごと食べようとしても実際に食べたのはトマトの時間部分だったとは信じがたいことである。本当にあの時食べたのがトマトの時間部分だったとしたら、なぜトマトはなくなってしまったのだろうか。四次元主義者は、現在のトマトの時間部分がなくなっても過去の時間部分は存在していると言うかもしれない。しかし、トマトの空間部分を食べても、トマトが全部なくなるわけではない。トマトを一齧りした後には食べかけのトマトが残されるだろう。物の空間的延長と物の持続の類比には限界があるのではないだろうか。四次元主義者は類比を不当に拡大解釈しているのではないだろうか。

さらに、三次元主義者の中には四次元的対象の存在自体を否定する者もいる。物も出来事もどちらも時間部分を持たないというのである。時間の中に延び拡がる対象が何もないとすれば、野球の選手や野球のボールやクラリネットのような人や物だけではなく、野球の試合も、交響曲の演奏も、それらが行われている最中のどの時点をとっても丸ごと現前しているということになるだろう。

同一の物が、また、同一の出来事が、持続的に存在するとはどのようなことなのだろうか。物と出来事の持続をめぐってもつれてしまった糸を解きほぐして行きたい[1]。

Ⅱ　余すところなく現れている

目の前のテーブルにピンポン玉が置かれているとしよう。このピンポン玉は様々な性質を持っている。白く、球形をしていて、直径はおよそ 4cm、重さは 2,7g で、よく弾み、テーブルにぶつけると乾いた音を響かせる。水の中に沈めようとしてもすぐに浮かび上がり、水には溶けないが火を近づけると溶け出す。壁にぶつけると一時的に形は歪むがすぐに復元し、今度は強く踏みつけてみるとひしゃげて元に戻らなくなってしまう。

ピンポン玉が持つこうした性質は、今、この瞬間に、余すところなく現れているのだろうか。たとえばピンポン玉の球形性は、余すところなく現れているのだろうか。それとも今ここにあるのは球形性の時間部分なのだろうか。

物が球形をしているとは、その物の輪郭がその物の中心から等距離にあるということである。それがどのような物質によって実現されていようが、どのような色をしていようが、大きさや重さがどれぐらいあろうが、球形性にとってはかかわりがない。さらに球形性がどれほどの時間にわたって実現されているかということも球形性の本質とは無縁のことである。セルロイド

が中心から等距離の位置に存在し続ける限り、ピンポン玉は球形性を実現しているのであり、その間のどの時点をとっても、球形性は余すところなく現れているのである。

大きさについても同様である。直径 4cm というピンポン玉の性質は、セルロイドが中心から 2cm のところにあり続ける限り十全に実現されているし、余すところなく現れている。

白さについても基本的には同じことが言えるだろう。白さの本質が、物質表面が特定の反射率を持つことにあるのだとすれば、夜中でも、見ている者が誰もいなくとも、その反射率が実現されていればその物は白い。そして白さは余すところなく現れている。あるいは、少なくとも、「白さが時間部分を持つ」とは理解不能な表現である。

水に溶けない、熱に弱い、ラケットに当たっても形はすぐ復元するが、ある程度以上の力を加えると形が元に戻らない、などの性質は微妙である。たとえば、ピンポン玉の形状復元力、いわゆる弾性は、今、テーブルの上に置かれているピンポン玉において余すところなく現れているのだろうか。それともピンポン球をラケットで打った時に初めて姿を現すのだろうか。

ここで、性質のミクロの基盤と、性質が持つ因果的効力と、因果的効力の顕在化を区別しておくのが便利である。弾性の場合は基盤となるのは物質原子の結合状態なのだろう。どの程度の力をピンポン玉に加えたらピンポン玉がひしゃげて元に戻らなくなってしまうかということは、ピンポン球を構成する原子の結合状態によって決まるのだろう。また、特定の弾性を持つ物は、一定限度内の力に対する形の復元力を持つ。ピンポン玉は、ラケットで打ったり、卓球台にたたきつけられたりしたぐらいではへこまず、すぐに元の球形に戻る。ピンポン玉の持つこうした形状復元力は常に顕在化しているわけではない。砂糖の水溶性が、砂糖を水に入れた時にはじめて顕在化するように、ピンポン玉の形状復元力は、ラケットに当たったり、台にたたきつけられたりして歪んだ直後に顕在化するのである。

ピンポン玉は、ミクロの基盤がピンポン玉において実現している限り、どの時点をとってみても一定の弾性を持っているが、それが顕在化するのは限られた瞬間のみである。そうだとすれば、ここで、ピンポン玉の弾性の顕在化の経歴、いわば、ピンポン玉の形状復元歴といったものを考えてみることができるだろう。これまで、ピンポン玉は幾度も幾度もラケットで打たれ、そのたびに形状復元力を発揮してきたことだろう。そのピンポン玉を床に落とし、弾ませてみる。何度か弾んだ後でピンポン玉は静止する。弾んだ瞬間に、ピンポン玉の形は少しは歪んだはずであるが、拾って見てみると、それは前と同じように球形をしている。やはり今度も形状復元力が発揮されたのである。

こうしたピンポン玉の変形と復元は、ピンポン玉の形状復元歴の一エピソードであるという意味で、形状復元歴の時間部分であると言ってよいだろう。ピンポン玉の形状復元歴に新たな一ページが加わったのである。

弾性や塑性のような傾向性だけではなく、白さや甘さのような可感的性質についても顕在化の経歴を考えることができる。白いものは白の視覚体験を引き起こすという因果的効力を、甘いものは甘さの感覚を引き起こすという因果的効力を持っている。しかし、それらの効力が常に発揮されているわけではない。たとえば、ピンポン玉はいつも白いが、夜中や誰も見ていない時には、白の視覚体験を引き起こすという白さの因果的効力は不活性の状態にある。真っ暗な工場で生産され、真っ暗な倉庫で保管され、一度も日の目を見ることなく廃棄されてしまっ

たピンポン玉があるとすれば、その白さは一度も効力を発揮することがなかったことになる。脆い素材でつくられたコップが、大事に取り扱われたおかげで脆さを見せなかった場合と同じである。しかし、目の前にあるピンポン玉は、私に白いその姿を現しているし、これまでにも多くの人の目に触れてきたことだろう。だから、このピンポン玉の白さは顕在化の経歴を持っている。白さの顕在化の経歴を白さの顕現歴と呼ぶことにすれば、今こうして私に白さの印象を生み出しているということはピンポン玉の白さの顕現歴の一部である。

形や大きさのような一次性質の場合は事情が複雑になる。たとえば球形性の場合、あらゆる球形の物が共通に持つ因果的効力は存在しない。球形をした物がどのような因果的効力を持つかは、それがどのような物質によってできているかによって決まる。透明な物質によってつくられたボールは球の視覚印象を引き起こさないし、粘着質の物質によってつくられた球は斜面に置いても転がらない。シャボン玉は触ると壊れるので、球形をしていても球の触覚印象を生み出すことはできない。

ピンポン玉に関して言えば、それが球形をしているがゆえに持つ因果的効力は複数ある。それは、球の視覚印象や触覚印象を引き起し、斜面に置けば転がり、セルロイド製の立方体とは違ってイレギュラー・バウンドせず、丸い穴にすっぽり入る。しかし、鉄球のように雪の上に落とした時に球形の跡を雪の上に残すことはない。セルロイド製のピンポン玉は軽すぎるからである。目の前のピンポン玉の球形性もこれまでこうした様々な仕方で姿を現してきたことだろう。このピンポン玉を、乱雑に積み重ねられ、傾いた本の山の上に置いてみる。するとそれは転がり出し、床に落ちてしまう。ピンポン玉の球形性の顕在化の歴史を構成するエピソードがまた一つ増えたというわけである。

弾性や白さや球形性のような性質はピンポン玉において余すところなく現れているが、それらの因果的効力の顕在化は時間上に散在している。それゆえ、性質の因果的効力の顕在化の歴史があるとすれば、それは、個々の顕在化のエピソードを時間部分として持つことになる。関ヶ原の戦いが日本の歴史の一部であるように、先程のピンポン玉の落下はピンポン玉の球形性の顕在化の歴史の一部なのである。性質の因果的効力の顕在化のエピソードを時間部分として、性質の顕在化の歴史が形成されて行くのである。

白さや球形性のような性質自体は、それらの効力の顕在化と違って、時間部分を持つことはない。しかし、白さや球形性がピンポン玉に現れていることが何かの時間部分であるということならばありうることである。次のようなケースを考えてみればよい。

ピンポン玉は生涯にわたってほぼ球形を保っているものの、ラケットで打たれたり台にたたきつけられたりして一時的に形が歪むことがある。ピンポン玉の球形性の顕在化だけではなく、ピンポン玉の形そのものにも歴史があるということである。ピンポン玉の形の経歴を形歴と呼ぶことにしよう。昨日ラケットで打たれて一時歪んだ形をしていたことはピンポン玉の形歴の一部であり、今、球形をしていることはそれに続く形歴の一部である。

また、普段はずっと白い色をしているピンポン玉が、試合に使われる時だけオレンジ色に塗られ、試合が終わると白に戻されるとしよう。そのピンポン玉は白とオレンジ色の交替からなる色歴を持つことになる。そして、昨日の試合中にオレンジ色をしていたことはピンポン玉の色歴の時間部分となる。

ここで、ピンポン玉の形歴や色歴の時間部分となっているのは球形性や白さではなく、ピン

ポン玉が球形をしている、あるいは、ピンポン玉が白い色をしている、というピンポン玉の状態である。状態を出来事の一種とするなら、時間部分となるのは出来事である。関ヶ原の戦いという出来事が日本の歴史の一部であり、ピンポン玉が転がり落ちるという出来事がピンポン玉の球形性の顕在化歴の一部であるのと同じように、ピンポン玉に生じた出来事がピンポン玉の形歴や色歴の部分となっているのである。

ピンポン玉やコップのような人工物についてだけでなく、人や猫のような生物に関しても同じことが言いうるだろう。たとえば「星野徹（TH）」と呼ばれているこの私は、身体の部分が入れ替わりながら持続的に存在し続けていると仮定しよう[2]。私は生涯にさまざまな姿勢をとるので、ピンポン玉の形歴に倣って、TH の姿勢歴とでも呼べるものを考えることができる。私が今椅子に座った姿勢をしていることは TH の姿勢歴の一部分である。日焼けと日焼けからの回復を繰り返す人の色歴と言ったものを考えることもできるだろう。また、体重が増え続けている人は目覚ましい体重歴を持つことだろう。そして、体重がとうとう 150kg を越えたという出来事は、その人の体重歴の特筆すべき時間部分となるだろう。

私はピンポン玉と違って、物理的性質だけではなく心的性質も持っている。私が怒りっぽい人間だとしよう。怒りっぽいという性質を易怒性と呼ぶことにしよう。私がスクリーン上の文字が思うように変換できないことに腹を立てているとすれば、私の易怒性が顕在化したことになる。TH の易怒性の顕在化の歴史を考えてみれば、今の私の怒りはその歴史の一部となる。

また、私には聴覚の能力がある。熟睡している間や、無音の世界ではその能力は効力を発揮しないが、今は、ルネサンスの宗教曲と時計の秒針の音が聞こえている。今、私に生じている聴覚体験は、TH の聴覚能力の発現の歴史の最先端の部分ということになる。

ここで時間部分を持つのは TH の易怒性や聴覚能力ではない。時間部分を持つのは、あるいは、時間部分によって構成されるのは、TH の易怒性の顕在化の経歴であり、TH の聴覚能力の発現の経歴である。そして、時間部分となるのは聴覚体験や怒りといった出来事である。

しかし、見方を変えれば、聴覚能力や易怒性のような TH の持つ傾向性の歴史といったものを想定することもできるようになる。私が不幸にして年齢とともに聴力を失って行くとしよう。また、年齢とともに何が起きても怒らないようになって行くとしよう。TH の聴覚能力や易怒性は変遷するのである。それらの変遷の歴史を考えれば、今、私に一定の聴覚能力があるということはその歴史のひとこまである。同じように、TH の性格の歴史を考えれば、今、私に一定程度の易怒性があるということは、TH の性格の歴史のひとこまである。しかし、ここでも、TH の聴覚能力歴や性格歴の時間部分となっているのは、聴覚能力や易怒性ではなく、TH が一定の聴力を持ち、易怒性を持つという TH の状態である。

球形性や白さのような性質には顕在化の歴史があり、ピンポン玉のような物には形歴や色歴が、TH のような人には姿勢歴や色歴に加えて性格歴や聴覚能力歴がある。それでは、ピンポン玉や TH それ自体は時間部分を持つのだろうか。それとも球形性や白さがどの時点においても余すところなく現れているように、目の前のピンポン玉やこの TH は今この瞬間に余すところなく現れているのだろうか。

Ⅲ　ピンポン玉性とこのピンポン玉性

ピンポン玉は野球のボールともゴルフボール

ともさいころとも違う。また、卓球というゲームが存在していない世界に目の前のピンポン玉と瓜二つの物体があったとしても、それはピンポン玉ではないだろう。ピンポン玉は、球形性や白さや弾性といった性質のほかに、ピンポン玉をピンポン玉たらしめているピンポン玉であるという性質を持っているように思われる。ピンポン玉であるという性質をピンポン玉性と呼ぶことにしよう。白さや球形性と並んでピンポン玉性という性質が本当にあるとすれば、目の前のピンポン玉は、ピンポン玉性が現実化したもの、あるいは、ピンポン玉性の一例ということになるだろう。では、ピンポン玉性とはいったいどのようなものなのだろうか。

ピンポン玉は、色は白かオレンジ、直径およそ 4 cm で、セルロイドでできている。しかし、卓球のルールが、ボールの色は青、ボールの直径は 6 cm、素材はゴムと、それぞれ決めていたかもしれない。その場合は、ピンポン玉は、青く、直径 6 cm で、ゴムでできていたことだろう。ピンポン玉が白やオレンジ色をしていたり、直径が 4 cm だったり、セルロイド製だったりするのはたまたまのことなのである。したがって、ピンポン玉の本質があるとすれば、それは、卓球のルールに定められた規格に従ってつくられ、卓球の試合や練習で使われるための機能を持つ物体である、といったようなものだろう。ピンポン玉がピンポン玉であるためには、それが、ピンポン玉をつくろうという意図のもとに製造され、規格に合致し、ピンポン玉の機能を果たすことができるのでなければならないということである。そのようにして製造された物において初めてピンポン玉性が実現するのである。だから、卓球のない世界にはピンポン玉もないのである。

目の前のピンポン玉はおそらくピンポン玉の製造メーカーによって、ピンポン玉の規格に従って、ピンポン玉として生産されたものだろう。目の前のピンポン玉においてピンポン玉性が実現しているのである。では、目の前のピンポン玉において、ピンポン玉性は、その全体が余すところなく現れているのだろうか。それとも目の前にあるのはピンポン玉性の時間部分にすぎないのだろうか。

目の前のピンポン玉はこれまで幾度となくピンポン玉として使用されてきたことだろう。公式戦で使われたこともあるかもしれないし、練習のために使われたかもしれない。このピンポン玉には、一つのピンポン玉として、他のピンポン玉とは違った独自の過去がある。目の前にある物体はピンポン玉としての歴史を背負っているのである。いわば、ピンポン玉性の顕在化歴を持っているのである。しかし、それとピンポン玉性に時間部分があることは別の話である。このピンポン玉は、それが存在している間のどの時点をとってもピンポン玉としての機能を持っていることだろうし、ピンポン玉としての規格に合致していることだろう。また、どの時点においても、ピンポン玉製造工場でピンポン玉として製造されたという起源をもっていることだろう。したがって、どの時点においても、ピンポン玉性は、このピンポン玉においてその全体が余すことなく現れている、と言うべきなのではないだろうか。そして、人の場合も同じではないだろうか。

人とは何かという問いは、ピンポン玉の本質を問う問いに比べてはるかに答えることが難しい。おそらく、人は、哺乳類であり、心的能力を持ち、特定の遺伝子配列を持ち、等々の性質を本質的性質として持つのだろう。こうした人であるための本質的性質を人性と呼ぶとすれば、TH が、それがどのようなものであれ、人性を持っていることは疑いない。また、人性が TH の本質的性質であることも同様に疑いのないこ

とである。TH は易怒性や聴力を失っても存在できるが、人性を失った瞬間に TH は存在しなくなるだろうからである。そして、TH の人生のその時々において TH の持つ人性は余すところなく現れているのではないだろうか。もちろん TH だけではない。世界中の一人一人の人間に人性が実現している。そして、それぞれの人間において、当の人性はどの瞬間においても、十全に、余すところなく現れているのではないだろうか。

それに対して四次元主義者は次のように反論するかもしれない。人性やピンポン玉性が余すところなく現れているかどうかが問題なのではない。問題なのは、目の前にいるあの人、また目の前にあるあのピンポン玉、あれが時間部分であるかどうかなのだ。

あのピンポン玉はこれまで数カ月かそれ以上の期間にわたって存在し続けてきたのだろうし、これからもまだしばらくは存在し続けることだろう。今、目の前にあるのはそのように存在し続けるピンポン玉の時間部分、あるいは、時間切片にすぎない、と四次元主義者は言いたいのである。ピンポン玉性という言葉を使いたければ、三次元主義と四次元主義の係争点は、ピンポン玉性一般ではなく、このピンポン玉性にかかわるものなのである。

このピンポン玉が製造された工場では、このピンポン玉と同じような性質を持ったピンポン玉がたくさん製造されてきたことだろう。そうした数多くのピンポン玉からこのピンポン玉を分かつこのピンポン玉の本質、このピンポン玉のこのピンポン玉性と呼べるような性質は果たして存在するのだろうか。

このピンポン玉が存在しているのは偶然のことである。ピンポン玉製造工場の製造ライン上のピンポン玉群の中にこのピンポン玉が含まれていなかったということはありうることである。世界のなかに神以外に必然的な存在などありえないのだからそれは当然のことである。それでは、生産ラインの中に他ならぬこのピンポン玉が含まれていたとはどのようなことなのだろうか。今、目の前に、他のよく似たピンポン玉ではなく、このピンポン玉があるとはどのようなことなのだろうか。

このピンポン玉と同じように、ソクラテスや豊臣秀吉が存在したのも偶然のことである。ソクラテスや豊臣秀吉が生まれなかったような世界について考えることができるからである。それでは、ソクラテスや豊臣秀吉が存在するとはどのようなことなのだろうか。

プランティンガは、ソクラテスが存在するとは、ソクラテスの本質、すなわちソクラテス性が例化されてあることであると言う（Plantinga, 2003）。球形性がピンポン玉において例化されているように、ソクラテス性がソクラテスにおいて例化されているわけである。ソクラテス性はソクラテスの本質なのであるから、ソクラテス性がソクラテス以外の人物に例化されることはありえない。しかし、ソクラテス性は必ず例化されるとは限らない。ソクラテスは生まれなかったかもしれないからである。その場合、ソクラテス性は例化されないまま存在し続けることになる。プランティンガが正しければ、例化を待つ無数の個体の本質が存在していることになる。ソクラテス性は選ばれた幸運な例外ということになるだろう[3]。

ソクラテスの 70 年ほどの人生には様々なことが生じただろうし、ソクラテスの身体の特徴もソクラテスの性格もその間に様変わりしたことだろう。ここで、ソクラテスが存在している間に持つことになる性質は、どの時点のどんな性質であれ、そのどれもがソクラテスであるためには不可欠であったと仮定してみよう。良妻を持ったり、美少年好きでなかったり、鼻が高

かったりしたら、それはソクラテスではないのである。こうして、ソクラテス性には、現実のソクラテスにおいて実現した性質のすべてが含まれているとすれば、ある瞬間におけるソクラテスには、ソクラテスの本質の一部しか例化していないことになるだろう。すると、その瞬間に現前しているのはソクラテス全体ではなく、ソクラテスの時間部分ということになるのではないだろうか。

そうではない。見かけとは逆に、ソクラテス性がソクラテスにおいて例化しているとすれば、ソクラテスが存在するどの時点においてもソクラテスが余すところなく現れていることになる。ある時点のソクラテスは、それ以前にソクラテスが持っていた性質と、それ以後にソクラテスが持つことになる性質を、それぞれいわば歴史的性質として担うことになるからである。モナドのように、瞬間的なソクラテスにはソクラテスの全生涯が折りたたまれているのである。

ソクラテスや豊臣秀吉に関してはともかく、このピンポン玉のような人工物が存在するとはこのピンポン玉性が例化することであるとは考えられないことである。ピンポン玉製造メーカーの誰かが、このピンポン玉を製造する際に、このピンポン玉性を例化させようと意図することによってこのピンポン玉を世に送り出した、などということはありそうもない。その人は規格通りのピンポン玉を大量生産しようとしただけである。彼はこのピンポン玉性ではなく、ピンポン玉性を大量に例化したのであり、その中の一つがたまたまここにやってきたのである。

このピンポン玉にも TH にも過去があり、歴史がある。形歴や性格歴のような内在的性質の変化に関する歴史だけでなはない。このピンポン玉や TH は関係的性質の歴史の担い手でもある。たとえば、ピンポン玉も TH も生涯の間に場所を転々とする。両者には場所の歴史がある。こうしてテーブルの上に置かれていることはピンポン玉の、またこうしてスクリーンの前にいることは TH の、それぞれ場所の歴史の最新部分である。一方、このピンポン玉はピンポン玉性の一例であり、TH は人性の一例である。そして、ピンポン玉性はどの時点のどのピンポン玉においても余すところなく現れており、人性はどの時点のどの人間においても余すところなく現れている。ピンポン玉の生涯は時間部分を持ち、人生も時間部分を持つ。しかし、目の前のピンポン玉にピンポン玉性は余すところなく現れており、いまのこの TH において人性は余すところなく現れているのである。

こうして、このピンポン玉の本質であるピンポン玉性が、今、余すところなく現れており、TH の本質である人性も、今、余すところなく現れているのならば、このピンポン玉も TH も、今、この瞬間に、丸ごと、余すところなく存在していると言うべきではないだろうか。

継続中の出来事に突然空白部分が生じたとしても、かならずしも出来事がそこで終わるわけではない。たとえば、ブルックナーの交響曲の演奏中に、楽団員たちが突然動きを止め、無音の瞬間がやってきたとしても、演奏が終了したとは限らない。直後にオーケストラが咆哮をすることもある。オーケストラが一瞬休止しただけなのである。また、ピンポン玉の形状復元歴にはたくさんの空白の部分がある。しかし、同一のピンポン玉が存在し続けている限り、ピンポン玉の形状復元歴は続いている。人や物はそうではない。確かに人も物も、出来事と同じように持続的に存在する。しかし、持続の最先端で消えてしまった人や物は戻ってこない。それは、人や物が持続のどの時点においても、全体が、丸ごと、余すところなく存在しているからである。

ソクラテスが毒杯を仰いだ直後に、ソクラテ

ス全体が世界からいなくなってしまったのは、最後の瞬間のソクラテスにおいてソクラテスが余すところなく現前していたからである。トマトを丸ごと食べたらトマトが全部なくなってしまったのも同じことである。トマトを丸ごと食べた人は、トマトの時間部分ではなく、トマトの全体を食べたのである。

出来事は時間部分を持つ四次元的存在で、物はそれが存在するどの時点においても余すところなく現れている三次元的存在であるという昔ながらの説が、結局のところは正しいのではないかと私は思う。

Ⅳ　物と出来事

物も出来事も持続的に存在する。しかし持続の仕方は異なる。その違いについてもう少し考えておきたい。

生まれたばかりの赤ちゃんを前にして、「この子はどのように成長して行くのだろうか」と思ったことのある人はたくさんいることだろう。また、コンサートの最初の一音を聞いて、「これはどのような演奏になるのだろうか」と思ったことのある人もいるだろう。赤ちゃんも交響曲の演奏も時間の中に存在し続ける。演奏は一時間余りのあいだ、赤ちゃんはおそらく数十年にわたって。また、これから展開する演奏が最初の一音に含まれているわけではないように、赤ちゃんの未来の姿が、今、目の前にいる赤ちゃんの中に折りたたまれているわけではない。このように、生まれたばかりの赤ちゃんと未来の赤ちゃんの関係は、演奏の初めの音と後に続く演奏の関係によく似ている。しかし、二つの間には大きな違いもある。

赤ちゃんを見ながら「この子はこれからどうなるのだろう」と考える人は、目の前のあの赤ちゃんに生じる変化について思いをはせている。どんどん大きくなり、目鼻立ちもくっきりし、やがて片言の言葉をしゃべりだすのは他ならぬあの赤ちゃんである。それに対して、最初の音を聞きながら「これはどのような演奏になるのだろうか」と考える人は、最初の音がどのように変容して行くのだろうかと想像しているのではない。一時間余り続く交響曲の演奏を通じて一つの音が変容をしながら存在し続けるわけではない。これから展開される演奏を待つ人は、最初の音にどのような音が続くのか、期待とともに一音も聞き逃すまいと待ち構えるのである。同様に、初球を投げようとするピッチャーの動作を見ながら「これはどのような試合になるのだろうか」と予想する人も、この投球を端緒として、続いて生じるであろう一連の出来事について予想しているのである。

物についても人と同じことが言える。物を前にしてその未来を思い描く人は、物そのものに何が生じるかを思い描いているのである。目の前の対象を構成する部分がいずれすっかり入れ替わってしまうことを知っている場合でもそれは変わらない。四次元主義者が好んで取り上げるテセウスの船のパズルと呼ばれる同一性の問題をめぐるパズルがそれに当たる。それは次のようなパズルである。

ギリシャの英雄テセウスの船は、航海から帰還する度に壊れた板を新しいものと取り換える。何度も何度も板を交換すれば、いずれ、最初にテセウス号を構成していた板がすべて入れ替わってしまう時が来るだろう。ところが、テセウス号から取り外された板は処分されず、港のそばの倉庫に保管されていた。そして最後の板が取り外されると、最後に取り外された板と倉庫に保管されていた板を合わせて、最初のテセウス号そっくりな船が新たに建造される。さて、最初のテセウス号と同一なのは、港に停泊中の修理されたばかりの船だろうか、それとも倉庫

で新たに建造された船だろうか。船の同一性にとって、船の形と機能を連続的に保っていることと、同じ材料から作られていることと、どちらが重要なのだろうか。

このパズル自体はそれほど興味を引くようなものではないかもしれない。船をめぐる状況は、パズルの定式化において文字通り余すところなく記述されつくしており、何をつけ加える必要もないからである。さらにこのパズルにおいて奇妙なのは、板の同一性が前提されていることである。同一の板が存在し続けるとはどのようなことなのだろうか。質的に同一の物が時空連続的に存在していれば、数的に同一の物が存在し続けていると言ってよいのだろうか。こうした問題の方が、同一性をめぐる問題としてはより根源的で、より重要であるように私は思うのであるが、それはさておき、パズルに対する四次元主義者のお定まりの解答は、最初のテセウス号は、修理された船と古材をつかって新たに建造された船、両方の船の時間部分となっている、というものである。

四次元的対象は時空上に延び拡がって存在している（四次元主義者はミミズのような虫にたとえて、ワームと呼ぶ）。そして、空間に延び拡がる対象が部分を共有することがあるように（国道254号線と国道463号線が一部区間重なり合っているように）、複数の四次元的対象が時間部分を共有することがあってもおかしくはない。こうして、部分を共有する二つのワームの存在を認めてしまえば、テセウスの船をめぐる形而上学的問題は解消されたのであり、あとに残るのは、どちらのワームに船の概念が適用されるかという概念の問題だけだと、例えば、サイダーは主張する（Sider, 2001）。

私自身はこのパズルに対する回答を持ち合わせているわけではない。次の点を指摘しておきたいだけである。初めての航海に出るテセウス号を見送るテセウス号の設計者は、テセウス号を待ち受ける運命に思いを巡らすかもしれない。その時、その人はやはり目の前のテセウス号の後に何が来るだろうかと考えているのではなく、目の前のテセウス号そのものの行く末を思っているのである。帰還するごとに部品が交換され、最後には古い部品で船が建造されることを知っているとしてもそれは変わらない。

たとえば、テセウス号が出航直後に火災で焼失してしまうとしよう。テセウス号は消えてしまうだろう。また、二度目の航海の最中に焼失してしまえば、残されるのは最初の修理で取りはずされた板一枚だけである。誰もがそう思うだろう。当たり前のことである。テセウス号の未来とは、目の前のあの船の未来のことであり、あの船に何が生じるかによって決まるからである。

ところで、サイダーのような四次元主義者は、世界には無数のワームが存在すると言う。初めての航海に出発するテセウス号を時間部分とするワームは二つには限らない。最初の一時間はテセウス号で、二時間目はエジプトの猫、三時間目は日本の土器、四時間目は火星といったワームも現実に存在している。出航前のテセウス号は無数のワームの時間部分となっているのである。われわれがそのことに思い至らないのは、われわれがそうしたワームに適用されるような概念を持ちあわせていないからにすぎないのである。

物が時間部分を持たないならば物のワームなど存在しないのは言うまでもない。それに加えて、無数のワームの存在を認めるならば、どの状況ではどのワームを選ぶのが適当かといった、ワームの選択に関する無益な哲学的問題を発生させることになるだろう。

一時間目のテセウス号が消えても、二時間目の猫や三時間目の土器が消えるわけではない。

火星はなおさらである。消えるのは、あるいは存在が不可能になるのは、二時間目以降のテセウス号であり、港と倉庫に存在することになったかもしれない未来の二つのテセウス号の候補である。同じように、今現在のピンポン玉と一時間前のトマトからなるワームを想定するのも無意味である。目の前のピンポン玉は、一時間前のトマトにその存在を依存しているわけではない。一時間前のトマトが食べられてしまったとしても、ピンポン玉はお構いなしに存在し続けるだろう。一方、一時間前のピンポン玉が消えてしまっていたら、目の前のピンポン玉も存在しなかっただろう。このことは、私が持つピンポン玉の概念とは何の関係もない、世界についての厳然たる事実である。

今現在存在している特定の対象が過去の特定の対象にその存在を依存しているということは、世界についての形而上学的事実であり、われわれの持つ対象の概念によって左右されることではない、と言うべきである[4]。

ところが、出来事となると話は変わってくる。なくなってしまったトマトや船は、端的に存在しなくなったのであるが、間欠的な出来事群からなる一つの大きな出来事といったものは、ブルックナーの交響曲の演奏やピンポン玉の形状復元歴以外にもたくさん存在する[5]。たとえば、雨で野球の試合が中断されたとしよう。試合の行われていない時間帯が生じたことになる。だからと言って、試合が終わってしまったとは限らない。30分の中断の後、再開されるかもしれない。再開された試合と中断前の試合はもちろん同一の試合である。野球のルールがそう決めているからである。

試合中に野球場では様々な出来事が生じている。観客がくしゃみをしたり、鳩がグラウンドに舞い降りて芝生をつついたり、雨のしずくが選手のヘルメットから滴り落ちたり…。これらは、野球の試合と同じ場所で、同じ時間帯に生じているにもかかわらず、試合の部分とはみなされない。プレーボール前のノックや、ゲームセット後のピッチャーのキャッチボールも、試合に参加した人物と同一人物によって行われる行為であるにもかかわらず、やはり試合の部分とはみなされない。それも野球のルールがそう決めたからである。われわれの持つ野球の概念がそれらの出来事を試合の部分から除外しているのである。野球を知らない人ならば、野球場で生じた出来事を別の仕方でひとくくりにすることだろう。こうしてひとくくりにされた出来事群をワームと呼ぶとすれば、その人には、野球ファンとは別のワームが見えていることだろう。物ワームは存在しないが、出来事ワームは存在するのである。

野球の試合や交響曲の演奏のように限られた場所で生じる出来事だけではなく、空間的に遠く離れた場所で生じる出来事が一つのワームを形成する場面を考えることもできる。たとえば、東京にいる人とリオデジャネイロにいる人が電話で話しているとすれば、二人の会話からなるワームが存在することになる。「もしもし、元気？」という発話行為はその最初の時間部分である。ある一日に日本でなされたすべての発話行為を順番に並べることによって形成されたワームを考えることもできる。「もしもし、元気？」はそうしたワームの部分でもある。さらに、その人の全生涯における行為の系列を考えることもできる。「もしもし、元気？」はその時間部分でもある。こうして、一つの出来事を部分として含むワームは無数に存在する。そして、それが、無数に存在するワームのどれに属するかということは、われわれがどのような概念を持っているかによって決まるのである。

われわれは、ある出来事を前にして、「これはこれからどうなるのだろうか」と考える。その

時われわれは、これにどのような出来事が続くのだろうか、と考えている。ところで、これに続いて生じる出来事は世界には無数にある。無数に生じるであろう出来事のうち、どれが眼前の出来事の後続者となるかは、眼前の出来事をどのような範疇に属するとみなすかによって決まるのである。

多くの三次元主義者は、出来事が時間部分を持つことは認めている。しかし、人や物に時間部分がないならば出来事にも時間部分はないはずだ、と主張する哲学者がいる。交響曲の演奏も野球の試合も、どの時点においても、全体が、余すところなく現前していると言うのである。こうした徹底した三次元主義者のメリックスは、移動する祭りを例として挙げている（Merricks, 1995）。メリックスによれば、物がどの時点においても余すところなく現れているならば、移動する祭りもある時点においてある場所にその全体が余すところなく現れていなければならないのである。

祭りの参加者が神輿を担いで通りを練り歩いて行くとすれば、確かに、祭りが続いている間は、どの時点においても、祭りの参加者と神輿は、通りのどこかの場所に余すところなく現れているだろう。しかし、それと祭り全体がある場所に余すところなく現れていることは別のことである。たとえば、400 m 走のランナーは、レースの間は、どの時点においても、必ずトラックのどこかに余すところなく現れているはずである。しかし、40 数秒間のレース全体が、レース中のどの瞬間においてもトラックのどこかに余すところなく現れるということなどありえない話である。レース全体とは、ランナーが 10 m 地点を通過し、次に 20 m 地点を通過し、次に 30 m 地点を通過し、…最後にゴール地点に到達する、という出来事の総体のことである。したがって、ランナーではなくレース全体が 10 m 地点に余すところなく現れることなどできない相談なのである。同じように、神輿と担ぎ手は、最初は場所 P に、次いで場所 P'に、次いで場所 P''に丸ごと現れることだろう。祭りとは、そうした出来事の集積である。そうした祭りが、ある場所に余すとことろなく出現することはやはりありえないことなのである。出来事がある瞬間に余すところなく現れているとする説は、人や物が時間部分を持つと考える四次元主義と同じように、カテゴリー・ミステイクを犯しているように思われる。

現代の四次元主義は、同一者不可識別の原理と人や物の持続的存在にどのように折り合いをつけるかという問題意識から出現したものである。x と y が同一ならば x と y は同じ性質を持つのでなければならない、という原理を受け入れる限り、同一の物が性質を変化させながら持続的に存在することなどありえないことになってしまうだろう。この問題を解決するための妙案が私にあるわけではない。しかし、少なくとも、人や物を四次元的対象とみなすことは、人や物の基本的な在り方を無視することであるように思われる。われわれは四次元主義とは別の道を探さなければならないのである。

注

1　三次元主義と四次元主義に関する文献はたくさんある。それぞれを代表する著作として、三次元主義者のものとして、Chisholm (1976)、Lowe (1998)、Mellor (1998)、van Inwagen (2001)を、四次元主義者の物としては、Lewis (1986)、Sider (2001)、中山（2009）を挙げることができる。

2　本論では、議論の都合上、人格の同一性をめぐる様々な問題は無視している。人格の同一性について詳しくは星野（2010b）を参照されたい。

3　現実に例化されることなく存在する個体の本質ついて、以前、批判的に検討したことがある。星野（2010a）を参照されたい。

4　人や物の通時的同一性が、内属的因果のような因果関

係によって説明されるべきであると私が考えているわけではない。同一性は因果関係よりもより基本的な関係であると思われる。内属的因果について、詳しくは星野（2010a）を参照されたい。

5　間欠的に存在する人や物は可能だろうか。その場合、おそらく質的同一性と数的同一性の区別は無効になるものと思われる。この問題についても、詳しくは星野（2010a）を参照されたい。

文献表

Chisholm, R. M.（1976), *Person and Object*, Open Court.

星野　徹（2010a）、「同一性とこのもの性」『埼玉大学紀要　教養学部』第 45 巻第 2 号。

星野　徹（2010b）、「意識、自己、実体」『埼玉大学紀要教養学部』第 46 巻第 1 号。

Lewis, D.（1986), *On the Plurality of Worlds*, Blackwell Publishing

Lowe, E. J.（1998), *The Possibility of Metaphysics*, Clarendon Press.

Mellor, D. H.（1998), *Real Time II*, Routledge.

Merricks, T.（1995), "On the Incompatibility of Enduring and Perduring Entities", in *Mind* 104.（柏端達也、青山拓央、谷川卓編訳『現代形而上学論文集』勁草書房、2006 年所収）

中山康雄（2009）、『現代唯名論の構築』、春秋社。

Plantinga, A.（2003), *Essays in the Metaphysics of Modality*, Oxford University Press.

Sider, T.（2001), *Four Dimensionalism*, Clarendon Press.（『四次元主義の哲学』中山康雄訳、春秋社）

van Inwagen P.（2001), *Ontology, Identity, and Modality*, Cambridge University Press.